様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2015
課題番号：２６７８００９７

研究課題名（和文）政治的リアリズムの再構成：政治理論のディシプリン確立に向けて

研究課題名（英文）Reconstructing Political Realism: Toward the Constitution of Political Theory as a Discipline

研究代表者
乙部　延剛（Otobe, Nobutaka）

茨城大学・人文学部・講師

研究者番号：５０７１３４７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：近年、日本語での規範的政治理論の研究は進展が目覚ましい。だが、規範的研究のみが、政治理論だろうか。本研究では、近年英語圏の政治理論で盛んに論じられるリアリズム政治理論をめぐる議論を手がかりに、非規範的な政治理論のあり方を探った。まず、レイモンド・ゴイス、バーナード・ウィリアムズらのリアリズム論の批判的検討を通じて、そこに「政治を固定的なものとして捉える態度」と、「政治そのものを流動的・動態的に捉える態度」の2つが存在していることを明らかにした。第二に、闘技デモクラシー論やジル・ドゥルーズの思想などを援用することで、後者の方向をさらに推し進める方策を探った。

研究成果の概要（英文）：This project pursued a possibility of non-normative political theory. By so doing, it aimed to enrich the scope of political theory in Japan, where most of the current studies focus on normative theories, while contributing to ongoing debates on realism political theory in the English-speaking world. More specifically, this project is divided into two phases. In the first phase, I critically analyzed the works on political realism by Raymond Geuss and Bernard Williams, revealing that their realism contains two incongruent orientations: the view that politics has a fixed reality and the view that politics is boundless and protean. In light of this incongruence, the second phase further pursued the latter orientation by drawing upon writings of agonistic democrats and Gilles Deleuze.

研究分野：政治理論

キーワード：政治的リアリズム　規範的政治理論　政治的なもの　レイモンド・ゴイス　バーナード・ウィリアムズ　闘技デモクラシー　ジル・ドゥルーズ

１．研究開始当初の背景

(1)　日本では、近年の政治理論研究の隆盛にあわせ、政治理論のディシプリンを論じる研究が活性化している（たとえば、政治学の他領域との関係を論じる田村(2008)、方法論上の精緻化を図る松元(2010)、規範的な理論の適用可能性を論じた松元(2012)）。これらの研究は、立場や重点の違いにも関わらず、いずれも、現実に対して「べき」という当為を提供する規範的なものとして政治理論を捉えている。だが、政治理論が規範的であるというのは自明だろうか。政治理論＝規範理論というイメージは、一般的なイメージに適合的ではある。だが、それは他方で、政治理論家は現実には適用不可能な空理空論である、との批判を引き起こして来たようにみえる。

(2) ここで注目されるのが、英語圏を中心に近年注目を集める「リアリズム政治理論」の動向である。レイモンド・ゴイス、故バーナード・ウィリアムズという、現代を代表する哲学者が主唱するリアリズム政治理論は、従来の規範的な政治理論を「道徳主義的」（Williams 2005)、「理想主義的」(Geuss 2008)として批判し、現実の政治により即した政治理論のあり方を訴えかけている。しかしながら、かれらのリアリズム像には問題が残る。かれらが説く政治理論像はしばしば曖昧で、混乱を引き起こすものであったからである。

２．研究の目的

(1) 上で述べたように、政治学の一分野としての政治理論には、存在（「である」）を分析する実証政治学に対して現実に対する当為（「べき」）を説くものという認識が当の政治理論研究者にさえ一般的である。政治理論の規範的性格に対し、リアリズム政治理論は疑念を投げかけるものの、当のリアリズム像の曖昧さもあり、その批判の射程は十分明確ではない。そこで本研究では、必ずしも規範の提示に留まらない政治理論のあり方を検討するために、リアリズム政治理論の批判的検討を行う。

(2) だが、本研究の目的は、現在の政治的リアリズムをめぐる論争に介入するだけではない。より重要な目的として、本研究では、政治的リアリズムの批判的検討を通じて得られた視座をもとに、非規範的な政治理論のディシプリンを探る。

３．研究の方法

(1)上記(1)(2)の目的を達成するために、本研究では、テキスト解釈と概念の分析という、政治理論の標準的な方法を用いた。

(2) 上での第一の課題である「リアリズム政治理論の批判的検討」に関しては、「リアリズム的」と呼ばれる過去・現在の理論家のうち、現在の政治的リアリズムの潮流の原点に位置するレイモンド・ゴイス、バーナード・ウィリアムズの両者を主な対象とする。政治思想・理論において長い歴史を持つリアリズム全体を包括するような研究は数年単位以上の大規模なものにならざるを得ない上、本研究のテーマである「政治理論のディシプリン」に直接関わるのは、両者に端を発する近年の動向だからである。また、近年のものに限っても、「リアリスト的」な議論の全体を対象にすると、議論の輪郭がぼやけてしまいかねないため、現在の潮流の端緒ということで、研究者のほぼ一致した合意が得られている両者に注目した。他方、単にゴイス、ウィリアムズの主張を紹介するのでなく、広い視座から検討するために、両者の著作について、リアリズム論、あるいは政治理論に関するもの以外のものも検討の俎上に載せた。

(3) 上で触れた第二の課題、「非規範的な政治理論のディシプリン探求」については、従来リアリズム的とみなされてこなかった政治理論や思想家にヒントや可能性を探り、発展させるという手法を取った。具体的には、闘技的デモクラシー論における「政治的なもの」への注目や、哲学者ジル・ドゥルーズが初期の著作で展開した「ドラマ化の方法」などである。

４．研究成果

(1) ①　第一の課題、「政治的リアリズムの再検討」については、ゴイス、ウィリアムズらのリアリズムに残る曖昧さを、相異なる 2 つの方向性の相剋として分析し、2014 年に世界政治学会 (International Political Science Association)、日本政治学会研究大会で報告を行った他、後者の報告をもとにした論文が査読を経て『年報政治学』2015-II 号に掲載された。

②　世界政治学会での報告（“Two Forms of Political Realism: Weberian and Nietzschean Realisms”)では、ウィリアムズ、ゴイスに存在する 2 つの方向性を、「ウェーバー的リアリズム」、「ニーチェ的リアリズム」と名付け、分析した。ウェーバー的リアリズムが、政治の権力的側面を重視し、規範的な理念の唱導に対して、慎重ながらも否定はしないのに対し、ニーチェ的リアリズムは、政治を、狭義の権力現象に留まらないものとして捉える結果、理論自体を政治の一部と捉えることになるのである。

③　政治学会における報告や、その後の公表論文（乙部 2015）では、上の視座をさらに発展させ、2 つの方向性を、「政治を固定的なものとして捉える態度」と、「政治そのものを流動的・動態的に捉える態度」として整理した。さらに、後者について、その政治観が闘技デモクラシー論等が注目してきた「政治的

なもの」と大きく重なることを指摘した。

④　リアリズム政治理論内に相異なる方向性を見出す研究は国内外に存在したが（Baderin 2014、田村 2014)、本研究はそれを一歩推し進め、両方向性をリアリズムの文献内に内在的に析出した上で、Baderin (2014) と異なり、「政治的なもの」のリアリズムが可能であると主張した点に大きな特徴がある。また、国内においては、乙部(2015)は、これまで殆ど存在しなかった論文レベルでのリアリズムに関する包括的な研究である。

(2) ①上の研究からは、「政治的なものの動態を把握する政治理論」というものが、リアリズムの非規範的な可能性として浮上した。しかしながら、リアリズムはこの可能性を必ずしも十全には追求していない。そこで本研究では、上に述べた第二の課題「非規範的な政治理論のディシプリン探求」として、リアリズム外の政治理論や思想を手がかりに、かかる可能性をさらに追求した。まず、「政治的なもの」についての考察を重ねてきた闘技デモクラシーに注目して分析を行い、共著論集の一章として刊行した（乙部 2016a)。

②　通常、「アゴーン（闘技）の称揚」という規範的主張にまとめられる闘技デモクラシー論だが、政治的なものの動態を把握しようとする目論見もまた存在しているのである。そうすることで、本研究は、闘技デモクラシー論の見過ごされがちな特徴を明らかにした。

(3) ①さらに、非規範的な政治理論の方法論を探る上で、本研究では、哲学者ジル・ドゥルーズが初期に提唱していた「ドラマ化」に注目した。ドラマ化の重要性は乙部（2015）の末尾でも触れたが、これをさらに展開すべく分析を進め、2015 年の政治思想学会研究大会や 2015 年のアメリカ政治学会（American Political Science Association)、2016 年の西部政治学会（Western Political Science Association）で報告を行った他、『政治思想研究』の特集論文のひとつとして寄稿した（乙部 2016b)。

②では、ドゥルーズの「ドラマ化」は、どのような形で政治理論に貢献するのだろうか。ドゥルーズの政治思想・政治理論としては、これまではガタリとの共著（『アンチ・オイディプス』と『千のプラトー』など）が中心に論じられてきた。そこでは、「ノマド的秩序」や「脱領域化」が肯定的に論じられているが、従来の研究は、これらの肯定的要素を、規範的ビジョンとして読み込んできたのであった（Patton 2011 など)。対して、本研究では、通常政治的な著作とは見なされてこなかった初期の代表作『差異と反復』に注目し、その政治的含意を探った。

③　政治思想学会での報告や、それをもとにした公表論文（乙部 2016b）では、『差異と反復』の政治的含意を、「政治と思考」という政治思想史上伝統的な二項対立を崩す点に見出した。すなわち、政治を固定された領域と見なすのではなく、思考にも存在する「政治的なもの」を見出すのである。

④　しかしながら、思考に政治的なものを見出す態度は、『差異と反復』において、規範的主張の可能性を困難にしている。なぜならば、思考はもはや政治の外部に位置して政治に指図することができなくなっているからである。このような不可能性は、しかしながら、本研究に取っては困難を意味しない。むしろ、規範的主張が不可能な地点で「政治的なもの」を語っていることにこそ、『差異と反復』の政治的射程は見出されるのである。

⑤　これらを論じた乙部（2016b）は、先に触れたように、英語圏を中心としたドゥルーズ研究において中心であった、「ドゥルーズの政治思想＝ガタリとの共著を中心として見いだされる規範的主張」という理解を打ち破る貢献をなしている。また、日本の政治思想研究において、同研究は、ドゥルーズを本格的に論じた数少ないものであり、その点でも政治思想・政治理論研究へ貢献している。

⑥ では、「政治的なもの」をこのようにして見出す方法論についてはどうか。本研究では、ドゥルーズが『差異と反復』や同時期の著作や発表でしばしば触れた「ドラマ化の方法」を取り上げ、非規範的な政治理論のモデルになるとして論じた。すなわち、ドラマ化は、「政治的なもの」が、いかなる条件で、どのように現われ、問題となるかを明るみに出す方法なのである。研究の成果はアメリカ政治学会や西部政治学会において発表した。

⑦ドゥルーズの「ドラマ化」を政治理論の研究手法のモデルとして論じた研究は英語圏には存在する（Mackenzie and Porter 2011)が、この先行研究では、「ドラマ化」がドゥルーズの哲学全体を包含する方法として扱われ、その結果、(『差異と反復』にみられる）非規範的な視座と（ガタリとの共著にみられる）規範的とも取れる視座が区別されない結果となってしまっている。これに対し、本研究では、ドゥルーズのテキストに即した読解を行うことで、『差異と反復』に代表される前期のドゥルーズの非規範的政治思想を明らかにしている。本研究については、学会報告をもとに、論文として出版すべく準備中である。

(3) 第二の研究課題（「非規範的な政治理論のディシプリン探求」）に関しては、これら、闘技デモクラシーおよびドゥルーズの思想を対象とした研究の他に、政治理論・思想以

外のリアリズムを参考にした考察も推し進めた。オーストラリア政治学会での報告では、リアリズム文学の代表者として知られるギュスターブ・フローベールの小説を取り上げ、非規範的な政治理論に与える示唆を検討した。通常非政治的、あるいは反政治的とすら見なされるフローベールの小説だが、デモクラシーの進行という時代状況を見据えている点で、トクヴィルとも相通ずるような政治的な観点が伏在している。さらに、自由間接話法を多用したフローベールの記述のスタイルは、上位の視点を設定せずに批判的視点を保つという、非規範的な政治理論の目論見にとっても有益な視座が存在することを明らかにした。現在、同報告の一部を発展させた内容を「政治思想にとって小説とはなにか?: フローベールとデモクラシー」(仮題)という原稿にまとめつつある。この原稿については、『特別講 義政治と文学』と題された論文集の一章として寄稿する予定である。

＜引用文献＞

Raymond Geuss (2008) *Philosophy and Real Politics*, Princeton UP.

Alice Baderin (2014) “Two Forms of Realism in Political Theory,” *European Journal of Political Theory* 13:2.

Iain MacKenzie and Robert Porter (2011) *Dramatizing the Political*, Palgrave.

Paul Patton (2011) *Deleuzian Concepts*, Stanford UP.

Bernard Williams (2004) *In the Beginning was the Deed*, Princeton UP.

乙部延剛（2015）「政治理論にとって現実とは何か：政治的リアリズムをめぐって」『年報政治学』2015-II 号。

-----（2016a)「デモクラシー：代議制デモクラシーは十分に民主的か」出原・長谷川・竹島編『原理から考える政治学』法律文化社。

-----（2016b）「ドゥルーズの「おろかさ」論：『差異と反復』の政治的射程」『政治思想研究』16。

田村哲樹 (2008)『熟議の理由』勁草書房。

-----（2014）「政治／政治的なるものの政治理論」田村・井上編『政治理論とは何か』風行社。

松元雅和(2010)「現代政治理論の方法に関する一考察」『年報政治学』2010-I 号。

-----(2012)「政治哲学における実行可能性問題の検討」『政治思想研究』12 号。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

1. 乙部延剛「ドゥルーズの「おろかさ」論：『差異と反復』の政治的射程」『政治思想研究』16 号、2016，117-134 頁。査読なし
2. 乙部延剛「「政治理論にとって現実とはなにか：政治的リアリズムをめぐって」『年報政治学』2015-II 号、2015、236-256 頁、査読有。

〔学会発表〕（計 6 件）

1. Nobutaka Otobe, “Political Theory of *Difference and Repetition*: Dramatization of the Political,” the Annual Meeting of Western Political Science Association (WPSA), 2016 年 3 月 25 日，サンディエゴ（アメリカ合衆国）.
2. Nobutaka Otobe, “Dramatisation as a Method of Realist Political Theory,” the Annual Meeting of American Political Science Association (APSA), 2015 年 9 月 5 日、サンフランシスコ（アメリカ合衆国）.
3. 乙部延剛、「政治理論は理性の要求なのか：ドゥルーズにおける「おろかさ」の問題を手掛かりに」、政治思想学会研究大会、2015 年 5 月 14 日、武蔵野大学有明キャンパス（東京）。
4. 乙部延剛、「どの実践に、どうやって架橋するのか:政治理論の役割の再検討」日本政治学会年次大会、2014 年 10 月 12 日、早稲田大学早稲田キャンパス（東京）
5. Nobutaka Otobe, “To Speak in One's Own Voice is to Speak in Clichés: Gustave Flaubert's Radical Criticism of Democratic Opinion-Formation,” the Annual Conference of Australian Political Studies Association, 2014 年 9 月 30 日、シドニー（オーストラリア）。
6. Nobutaka Otobe, “Two Forms of Political Realism: Weberian and Nietzschean Realisms,” IPSA World Congress, 2014 年 7 月 22 日、モントリオール（カナダ）。

〔図書〕（計 1 件）

1．乙部延剛、「デモクラシー：代議制デモクラシーは十分に民主的か」出原政雄、長谷川一年、竹島博之編『原理から考える政治学』法律文化社、2016 年、3-21 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

乙部　延剛（OTOBE, Nobutaka）
茨城大学・人文学部・講師
研究者番号：50713476